ベイビー・イッツ・ユー

Baby It's You

1983年 アメリカ映画 カラー 1時間45分 監督／脚本 ジョン・セイルズ 製作 クリフィン・ダン エイミー・ロビンソン 出演 ロザンナ・アークェット ヴィンセント・スパーノ 配給 ユーロスペース

ハイスクールのあとにも、人生は続くの？

60年代のアメリカ。60年代の恋。60年代の歌。
あの時代に大人になって行くって、こういうことだった。

ベイビー・イッツ・ユー Baby It's You

1983年 アメリカ映画
カラー 35ミリ ヴィスタサイズ 1時間45分
配給＝ユーロスペース

監督＋脚本＝ジョン・セイルズ　原作＝エイミー・ロビンソン
製作＝グリフィン・ダン/エイミー・ロビンソン　撮影＝ミヒャエル・バルハウス　美術＝ジェフリー・タウンゼント　編集＝ソニャ・ポロンスキー　衣裳＝フラン・リー
A DOUBLE PLAY PRODUCTIONS/PARAMOUNT PICTURES PRESENTS
出演＝ロザンナ・アークェット(ジル)/ヴィンセント・スパーノ(シーク)/マシュー・モーディン(スティーヴ)/ジョアンナ・マーリン(ジルの母)/ジャック・デイヴィッドソン(ジルの父)/ニック・フェラーリ(シークの父)/ドロレス・メッシーナ(シークの母)/ライアン・カーティス(ジョディ)

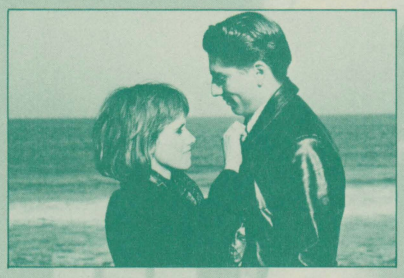
かいせつ
川本三郎

さまざまな人種や階層が雑多に住んでいるアメリカのことを以前は「人種のるつぼ」と呼んでいたが最近ではむしろ「人種のサラダボウル」と呼ぶようになってきた。「るつぼ」の場合は異質なものが溶け合うのに対し「サラダボウル」の場合は異質なものが溶け合うことはない。アメリカは結局はさまざまな人種や階層がばらばらに生きているだけではないのか。そこから「サラダボウル」という言葉が生まれた。

ジョン・セイルズの最初の(そしていまのところ最後の)メジャー作品である『ベイビー・イッツ・ユー』はこのアメリカ社会の異質性にこだわった苦い青春ラヴ・ストーリーである。

ロザンナ・アークェット(小鹿のようで本当に可愛い!)のジルはユダヤ系のアッパー・ミドル・クラスの女の子である。上流ではないがそれなりのお嬢さん、いわゆるJAP(ジューイッシュ・アメリカン・プリンセス)といっていいだろう。ニュージャージーの高校を出ると名門女子大サラ・ローレンス大学に進学する。

一方、ヴィンセント・スパーノ(近作はターヴィアーニ兄弟の『グッド・モーニング・バビロン!』)の"シーク"はイタリア系のロワー・クラスの子どもである。優等生のジルに対してストリート・キッドであり、ニュージャージー州ホーボーケン出身のイタリア系歌手フランク・シナトラに憧れて、高校を卒業するとマイアミのクラブで働くようになる。『ベイビー・イッツ・ユー』はこの生活環境のまったく違う二人の、いわば「他者との出会い」(ストレンジャー・ミート)の物語である。その点ではWASPの大金持の息子とイタリア系の貧しい家の娘の物語『ある愛の詩』に似ている。ただ、『ベイビー・イッツ・ユー』のほうが二人の異質性にこだわり続けているぶん、ずっと印象は重い。



最後、ハイスクール時代の愛し合った甘い思い出にすがろうとする"シーク"に、ジルは泣きながら「私たちもう高校生じゃないわ!」と叫ぶ。すでに二人の前途には「現実」という厄介なものがあらわれている。ジョン・セイルズは「高校時代は最後の民主主義社会だ」という名言をいっているが、その"最後の楽園"を出たあと、二人はもう別々の道を歩いていく他ないのだろう。プロムで二人がシナトラの「夜のストレンジャー」に合わせて踊るのは、二人の異質性の確認であり、別れの最後の儀式である。

ともすれば楽天的な同質性でハッピーエンディングにする青春映画が多いなかで、ジョン・セイルズは最後まで異質性にこだわってみせる。おそらく異質性の確認はジョン・セイルズにとって変わらぬテーマなのだろう。

この映画はまた『アメリカン・グラフィティ』同様懐かしのアメリカン・ポップスが多用されている。映画のタイトルにもなった「ベイビー・イッツ・ユー」はじめ「青い影」「ラヴァーズ・コンチェルト」「スタンド・バイ・ミー」など。女子大の部屋でマリファナを吸うシーンで流れる曲はベルベット・アンダーグラウンドの「毛皮のビーナス」である。ハイスクール時代には同じ曲を聞いた人間たちの音楽的趣味もやがては違ってくることが流れる曲のなかで微妙に描かれているのも聴きのがせない。ジョン・セイルズの作品は一見、穏やかなようでいて底に流れているものはあくまでも苦い。

あらすじ

1966年、ニュージャージーのハイスクール。ジル(ロザンナ・アークェット)はユダヤ系のお金持ちのお嬢さん。美人で成績も良い模範生だがまるで育ちの違うシーク(ヴィンセント・スパーノ)に恋してしまう。車を乗りまわし、退学をくりかえすシークは、先生とは目のかたきながらなかなかの人気者。楽しい高校生活も終わり、二人はそれぞれの道を歩む。第二のシナトラをめざすシークはマイアミのクラブで働き、ジルは名門サラ・ローレンス大学へ。サルトルやキルケゴールを学ぶかたわら、演劇部に入り、酒やマリファナも経験する。新しい生活をはじめた二人が再会した時、初めてお互いの境遇の差を知り、二人は驚き、傷つく。

11月21日㊏よりロードショウ
特別御鑑賞券1,200円発売中
当日一般　1,500円／学生1,300円のところ
当劇場窓口、チケットセゾン、ほかでお求めください。
●上映時間

連　日	10:40	12:45	2:50	4:55	7:00	㊏及び½夜9:05

光が丘テアトル西友
光が丘パークタウン・光が丘西武3階
●東上線、有楽町線「成増駅」よりバス10分
●西武線「豊島園駅」よりバス15分、光が丘団地下車
お問い合せ　Tel.03(979)6000